

研究概要(2年次)

はじめに

杉並区立高井戸第二小学校長 前田佐和子

子どもたちには人間らしくたくましく生き抜いていく力の基礎を身に付けさせることが、私たち小学校の責務です。変化の激しい時代にあっては、受け身の姿勢で教え込まれた知識だけでは生き抜いていくことはできません。現状を分析し、解決すべき問題は何なのか、課題解決のためにはどうすればよいのか、よりよく解決することはできないか等、自分自身で主体的に立ち向かっていく姿勢が求められると考えます。

杉並区教育課題研究指定校として「学びの構造転換」に取り組んで2年目、ここまで得られた研究成果を本リーフレットにまとめさせていただきました。

本校が目指しているのは、教師の発問で誘導される一斉一律の授業ではなく、個別多様な一人ひとりを学習の主体者として、その子自身の問い合わせを大切にした授業です。個の多様性を生かし、一人ひとりが主体的に自らの課題を他者と協働して探究する学びへと転換を図ることが杉並区の命題とする「学びの構造転換」です。これは、学習指導要領にある各教科の目指す資質・能力を育むための主体的・対話的で深い学びの実現に他ならず、これまで地道に取り組み、蓄積してきた実践と異なるものではないと考えます。

本校では、ICTを道具として使いこなしつつ、AIにはできないこと、人が人らしく、多様な人の中でよりよく生きるために、対話でつながり、対話で広がり、対話で深まることを大切に研究を進めてきました。幸いなことに本校は、昨日より今日、よりよい授業ができる自分を目指し、仲間と協働し、明るく切磋琢磨できる教員集団です。研究はまだ半ばですが、一つ一つ確認しながら、教育課題研究指定校としての最終年度になる令和3年度の歩みへとつなげていきたいと考えています。

終わりになりましたが、本校の研究を温かくご指導いただきました東京学芸大学教授 中村和弘先生、明星大学教育学部教職担当客員教授 邑上裕子先生に心よりお礼申し上げます。

〈研究課題〉 次代の教育課題に関わる研究 教科等における学びの構造転換

〈研究主題〉 主体的・協働的な学びを通して、思いや考えを深める児童の育成

目指す児童像（令和2年度）

【低学年分科会】

対話を楽しみ相手の考えを受け止め自分の考えにつなげる児童

【中学年分科会】

互いの考えを受けとめ合い、自分の考えを明確にする児童

【高学年分科会】

伝え合いを通して、考え方を見つめ直す児童

【久我山分科会】

「わかる！できる！活動」を通して思いを伝え合う児童

〈研究計画〉

3か年計画

段階	期間	研究内容	
第1期 試す	H31年4月～R元年8月	国語 話すこと聞くこと領域	<ul style="list-style-type: none">・日常的な取組（帯・ミニ単元）・研究授業準備（夏季休業中）2回
第2期 知る・つかむ	R元年9月～R2年3月		<ul style="list-style-type: none">・研究授業（区内公開）5回・主題に迫る手立ての検討・指導計画の見直し
第3期 深める	R2年4月～R3年3月	国語全領域 (対話活動をいかして)	<ul style="list-style-type: none">・日常的な取組（年間通して）・研究授業（区内公開）5回（国語）・主題に迫る手立ての実施・リーフレット作成（年度末完成）
第4期 広げる	R2年11月～R3年12月	全教科領域 (対話活動をいかして)	<ul style="list-style-type: none">・日常的な取組・研究授業（区内公開）8回 (令和2年度 理科・体育・社会・算数 令和3年度 4回予定)・研究内容の検証
第5期 伝える	R4年2月		<ul style="list-style-type: none">・研究発表会

＜成果と課題・今後の方向性＞

成果

- 学びの構造転換を意識した学習を目指し、児童一人ひとりの疑問や思い、考えを大切に教材研究する姿勢が身に付いた。
- 児童が主体的に取り組むための単元の導入方法を共通理解できた。
- 児童に自己決定を委ねる単元計画の中でも、指導事項をきちんとおさえることの大切さが分かった。
- 課題解決に向けて何をどのようにすればよいかを児童が分かり、意欲的に一人ひとりが考えるようになった。
- 協働の方法（短冊・ロイロノート・付箋・意図的グルーピング）を活用することで、児童が課題解決に向けて自然に話し合うようになり、主体的・協働的に考えを深めることができるようになった。
- 初めは国語科を中心に行っていたが、他教科においても主体的・協働的な学びを意識した単元計画を立て、児童主体の授業ができるようになってきた。

課題・今後の方向性

課題	今後の方向性
・児童が個人課題を立てることが難しい。（学年や実態による）	・研究として、1年生からどのような学習を積み上げていくと、徐々にできるようになるのか、系統性を生かす。また、今までの実践を生かす。（個人課題の例を示す。）
・限られた時間の中で、児童の主体性を尊重しつつ、指導事項をおさえることに標準の時数よりも多くの時間を要する。	・指導事項が多い場合は、時間との兼ね合いを見て単元計画を見直す。また、これまでの実践をもとに、単元を開発し、実践を増やしていく。
・児童の選択に任せた話し合いで、話し合う相手や量に偏りが出る。	・他教科とのバランスを考えて、カリキュラムマネジメントをし、必要に応じた協働が主体的にできるようにしたい。 ・主体的に話し合う対話の力をはぐくむ「高ニトーク」を常時活動にすることで、国語「話す・聞く」領域のねらいを明確にして指導する。
・個人課題が、指導事項に結び付かない場合がある。	・教材研究を生かし、児童自身がつながりに気付くように教師が問い合わせたり、価値づけたりする。
・一斉一律ではない時間（個別探究）の評価に工夫が必要である。	・評価計画に基づきながら、一人ひとりの実態に合わせた評価をしていく。
・学びの構造転換に取り組むことのできる教科、領域が限られる。	・どこでどのような取組をするかは、吟味が必要である。

